

いろは文字 鉤くさり (その二十一 遊び事すき)

河尻 成 泰 成

いろはにほへと ちりぬるを 色は匂へど 散りぬるを
わかよたれそ つねならむ 我が世誰ぞ 常ならむ
うるのおくやま けふこえて 有為の奥山 今日越えて
あさきゆめみし ゑひもせず 浅き夢見じ 酔ひもせず

(ん)

以呂波のころ

論語の言葉

花よりほかに

日本の笑顔

ほのぼの匂へ

返歌如何にと

問ひたき気持

知は力なり

林檎は落ちぬ

射干玉の夜

流浪丈夫

大蛇の神話

和を以て為すか

かの太子の世

歓びの歌

魂揺すれ

冷酒はここぞ

その猪口ひとつ

月夜琴の音

寝酒を飲まな

七人の娘ら

落花に舞はむ

空し万考
むな ばんかう

打つ手無く無為
むな ぶたか なく むゐ

囲碁名人の
ゐご

覗く石おお
のぞ

五輪咲く
おりんびつく

奇しき競ひや
く させ

やをら次の間

微睡の酒
まじろみ

景三山賦
けいさんざんふ

藤原京
ふじはらみやこ

ここ風は冴え
さ

枝に添ふる手
そ

手前の囁
かかあ

赤鼻面さ
あかはなづら

桜夕月
ゆふづき

昨日のよき湯
きのふ

湯冷めに嚏
くさまめ

名工匠
たくみ

耳のみ残し

四面泣声
しめんなきしゑ

笑酒微酔
ゑぐしほろよひ

一入なるも
ひとしほ

百種に寄せ
ももくひく

拙は遊びす
せつ ずび

すべてはこれ无
む

(平成三十年三月五日)

花よりほかに||もろともにあはれと思へ山桜花よりほかに知る人もなし、ふと浮かんだこの句、拝借。

射干玉の||ヌバタマはヒオウギの種子で黒いので、黒や夜に関連する物の枕詞。

歓びの歌||志貴皇子「石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりにけるかも」(万葉

集巻八―一四一八)とベートーベン交響曲第九「合唱」

寝酒を飲まな||寝酒を飲もう、飲みたい。「な」は意思、希望。

奇しき競ひや||万葉人がこれらの競技を見たら、びっくり仰天、口はあんぐり。

湯冷めに嚏||いい温泉につかったのに風邪ひいた？

笑酒微酔||笑酒は飲んで楽しくなる酒。百済から渡来した酒造りが醸して献上した酒に酔

った応神天皇がその酒を「笑酒」、「事無酒」(平安をもたらず酒)と言って喜んだ。

拙は遊びす||拙は自分のこと、拙者。遊びは気の向くまま、気まぐれ、もてあそび。詩句

などを気ままに歌うのが口遊み。

後記

全くもって気紛れな遊び。人に見せるなんて気恥ずかしい。

ここのところ万葉歌が続いた。今回は息抜きのつもり。前後の脈絡、意味のつながりに気を使わないで、行きあたりばつたりの気紛れ行脚。ずっと前の「その二」以来。これが一体何ほどのものか、お堅いことは言わずに、まあお許しを。

(平成三十年三月六日)